

B型肝炎を予防しよう

感染制御部

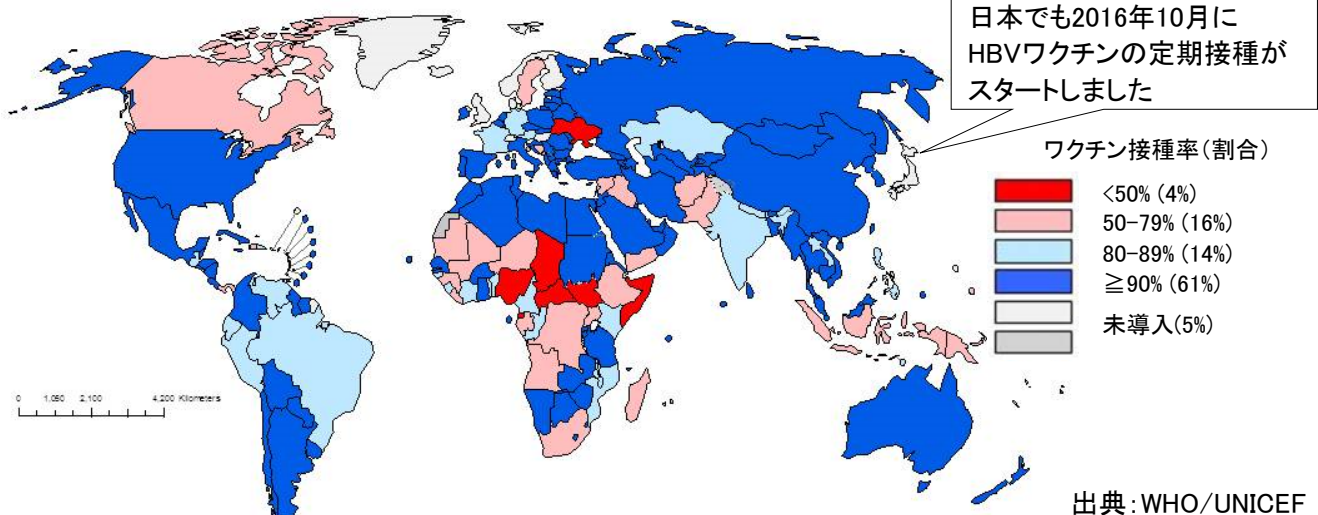
1. B型肝炎ウイルスとは

B型肝炎ウイルス(HBV)は体液曝露により感染しうするため、**血液・体液に曝露する可能性のある医療従事者はHBVワクチン接種を受け予防抗体を獲得することが強く推奨されています**。また、明らかな体液曝露事例が無くとも、環境中に残存するHBVへの曝露で感染が成立し得ることも分かっています。したがって、当院では外来・病棟に出入りする事務職員も含めてHBVワクチン接種の対象としています。

2. HBVワクチンの現状

HBVワクチンは世界180か国以上で小児定期接種ワクチンに導入されており、ユニバーサルワクチンと称されていますが、**本邦では2016年に定期接種化されたところ**です。そのため多くの日本人はHBVワクチン接種歴がありません。医療現場では、卒業前・入職前にワクチン接種を受ける学生も多くなってきましたが、ワクチン接種は義務化されておらず、**予防抗体未獲得のまま病棟業務を行っている医療従事者が一定数存在する**のが現状です。

《世界におけるHBVワクチンの定期接種状況 (2016)》



3. HBVワクチン接種の実際

HBV感染はワクチン接種で防ぐことが可能です！ 病院内で働くこと＝HBV曝露リスク、と考え、積極的にワクチン接種を受けてください。

通常、**0-1-6か月の3回接種で1シリーズの接種**になります。**初回接種後、2回目・3回目の接種を受けなかった場合は初めから打ち直しとなりますので、途中でドロップアウトしないように注意してください**。最終接種から1-2か月後に予防抗体(HBs抗体)検査を行い免疫獲得の有無を確認します。初回のワクチン接種シリーズで予防抗体が獲得できなかった場合、再度の1シリーズ(3回接種)のワクチン接種をします。

一般的にワクチン接種後に十分な予防抗体の上昇が確認できた場合は、その後の抗体検査や追加ワクチン接種は不要とされています。しかし、予防抗体の減衰に伴いHBV感染した事例が報告されており、**当院では年1回の抗体測定と抗体陰転化した人に対するワクチンの追加接種を行っています**。

4. ワクチン接種で予防抗体が陽性にならない時はどうするか

HBVワクチンを複数シリーズ接種しても十分な予防抗体が獲得できない人が一定の割合存在します。年齢(40歳以上)、男性、肥満、喫煙、慢性疾患などがワクチン不応性のリスク因子とされています。その場合、皮内接種や高用量接種の有効性などが報告されていますが、用法用量外投与法になるため当院では積極的には実施していません。一般に、**3シリーズ接種しても抗体が陽転化しない場合には、以降のワクチン接種の有効性は期待できないと考え、被接種者と相談の上、中止しています**。**予防抗体陰性の医療従事者にHBVへの曝露があった場合、免疫グロブリン投与などを考慮する必要があるため、体液曝露があれば速やかに届け出てください**。